

和辻哲郎の倫理学

和辻哲郎は、日本人の伝統的な生き方に根ざした独自の倫理学を打ち立てた。和辻によれば、西洋の近代的な考え方の基本には、孤立した自己の立場から世界を考えていこうとする個人主義がある。しかし、人間は一人では決して生きていけない存在であり、生まれたときから、すでに他人と切っても切れない関係のなかを生きているのである。そうした人間のあり方を、和辻は「間柄的存在」とよんだ。さまざまな「間柄」に応じた「役割」を引き受けて生きるのが人間だというのが、和辻の「間柄」を支えるのは「信頼」であるとした。こうした和辻の「信頼」に基づく倫理学は、「和」を重んじる日本人の伝統的な倫理観を哲学的にとらえ直したものといえよう。

柳田国男と民俗学

柳田国男は、「家」や「村」など古くからある共同体における、日本人の伝統的な生き方を明らかにしようとした。その際柳田は、文字によって残された資料ではなく、彼が「常民」とよぶ一般の庶民によって受け継がれてきた民間伝承を手がかりとした。

「民俗学」とは、文献以外の伝承を手がかりにして、伝統的な生活文化を研究する学問のことであるが、柳田は日本におけるそうした学問の創始者であった。

『遠野物語』にみられるように、当初柳田は「山人」とよばれる山中で生活する人々に強い関心をもっていたが、やがて平地に住む稲作農耕民こそが日本文化の中心をなすものだと考えるようになっていった。

Tanakaコラム

西田哲学の源流

西田幾多郎は高校のとき、当時の国家主義的な教育に反抗したため、退学処分になってしまいます。その後東京大学に学びますが、きちんとした学歴がないために、「選科」という聴講生のような立場になるしかありませんでした。つまり、西田の正式な学歴は、今でいう「中卒」なのです。でも、そのことをバネにして西田は日本一の哲学者となったのです。